

松葉園遺跡 2

松葉園遺跡 2

—第5次調査—

大野城市文化財調査報告書 第195集



大野城市文化財調査報告書 第196集

大野城市教育委員会

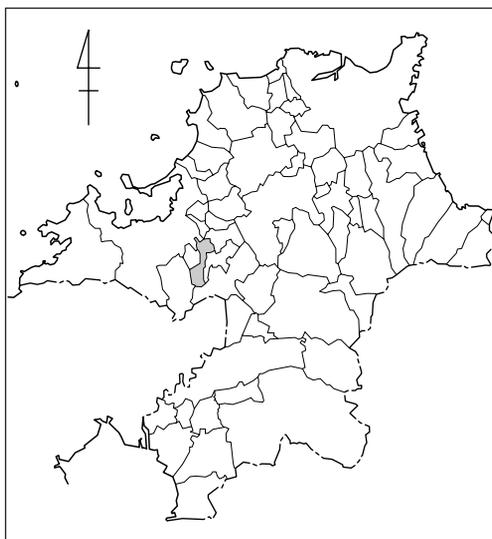
2022

大野城市教育委員会

まつ ば ぞの
松葉園遺跡 2

— 第 5 次 調 査 —

大野城市文化財調査報告書 第195集



序

松葉園遺跡は昭和54年に畑の中から偶然、石棺墓が掘り出されたことを契機に遺跡として認識されるようになりました。平成8年に第1次の調査を実施して以降、今回の調査が第5次調査となります。

本遺跡は弥生時代中期から古墳時代、中世、近世へと幾重にも時代が重なりますが、中でも中心をなすのは弥生時代中期～後期にかけての遺跡で、1次調査では丹塗りの祭祀土器が多量に見つかり注目されます。周辺には、中・寺尾遺跡や森園遺跡など、本市の弥生時代の中核的な遺跡が見つかっており、本市では数少ない弥生時代の貴重な遺跡と言えます。

一方、2・3次の調査では高価な輸入陶磁器を副葬した墓や、土器類が多量に出土した溝などが見つかり、平安時代から中世にかけて一帯には大きな集落があり、ムラの有力者がいたことを伺わせる遺構も見つかっています。更に、今回の第5次調査では、16世紀ごろの井戸や近世の土坑など、今までより新しい時代の遺構が見つかっていて、平安時代から近世の乙金村の成り立ちや発展を考える資料が得られたと思われまます。

本書は第5次調査の成果を報告するものですが、本書が広く周知、活用され、考古学の深化はもちろん、本市の歴史教育や文化財保護思想の啓発に活用して頂ければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査および報告書刊行に際しましては、土地所有者を始め関係各位に多大な理解・ご協力をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

令和4年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 伊藤 啓二

例 言

1. 本書は、福岡県大野城市川久保3丁目198番1・2で計画される宅地造成に伴う事前の発掘調査として実施した、松葉園遺跡第5次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大野城市教育委員会が主体となり、株式会社東部興産から委託を受けて実施した。
3. 本書で使用する実測図は遺構図を木原堯・澤田康夫が作成し、遺物実測図・拓本は小嶋のり子、白井典子、仲村美幸、津田りえ、松本友里江、氷室 優、古賀栄子、小畑貴子、篠田千恵子が作成したものを小嶋が製図した。
4. 本書で使用する写真は遺構を木原が撮影し、遺物写真は写測エンジニアリング㈱に委託し、牛嶋 茂が撮影したものを使用した。
5. 本書図中の方位は座標北を示し、座標は国土座標（第Ⅱ系）を使用している。
6. 本書で使用する遺跡分布図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』を使用し、近隣市の遺跡包蔵地分布図を参考にした。
7. 本書の執筆は木原、澤田が担当し、編集は澤田が行った。
8. 本書掲載の遺物・写真・実測図は大野城市教育委員会で保管している。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
II. 立地と歴史的環境	
1. 遺跡の立地	3
2. 歴史的環境	3
III. 調査の成果	
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	6
IV. まとめ	
図版	

挿図目次

第1図 調査地位置図 (1/2,500)	2
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図 遺構配置図 (1/200)	5
第4図 SE01実測図 (1/40)	6
第5図 SE01出土遺物実測図 (1/3)	7
第6図 SK01実測図 (1/40)	8
第7図 SK01出土遺物実測図 (1/3)	8
第8図 その他の出土遺物実測図	9

図版目次

図版1	I区全景、II区全景
図版2	SE01、SK01
図版3	調査区細部、井戸細部、調査前、作業風景
図版4	出土遺物

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

調査対象地は大野城市川久保3丁目198番1・2に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「松葉園遺跡」の包蔵地内に含まれる。

令和元年5月10日、事業者から対象地の埋蔵文化財に関する問い合わせがあった。事業者は当該地において宅地造成を行う予定であったが、当該地は包蔵地の隣接地にあたり、令和元年7月9日に試掘調査を実施した。その結果、遺跡が確認され、計画通りに工事が施工されると遺跡が破壊される部分があるため、事業者との協議を重ねた結果、恒久的な施設である進入路、及び宅地により遺跡が破壊される一部分について発掘調査を実施することとなった。なお、包蔵地範囲は令和元年12月11日付けで今回調査部分まで包蔵地範囲の変更が行われている。

事業者からの造成・建設予定図面を添えて93条に基づく届出を福岡県教育庁あてに提出し、令和2年2月27日付で発掘調査の指示が出された。また、令和2年1月9日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が市に提出された。これを受け、発掘調査は令和2年度、整理・報告書作成は令和3年度に実施する旨、協議書を締結し、年度ごとに委託契約を締結し事業を実施した。

調査面積は、調査対象地990.19㎡のうち、道路部の約150㎡である。発掘調査は、令和2年4月22日～令和2年5月22日まで現地で実施し、令和3年度に整理作業及び報告書作成を実施した。なお発掘調査及び整理作業に関する費用は、事業者と市で折半して負担した。

2. 調査組織

令和2年度・令和3年度における発掘調査・整理作業体制は以下の通りである。

令和2年度（発掘調査）

教育長	吉富 修				
教育部長	日野 和弘				
ふるさと文化財課長	石木 秀啓				
係長	上田 龍児	林 潤也	佐藤 智郁（～4月）		
主査	徳本 洋一				
主任主事	秋穂 敏明				
技師	山元 瞭平	齋藤 明日香			
会計年度任用職員（調査）	澤田 康夫	木原 堯（調査担当）			
会計年度任用職員（庶務）	西村 友美	三好 りさ			
会計年度任用職員（現場作業）					
	井上 光江	大浦 旗江	金子 伸子	篠崎 繁美	田代 薫
	東島 真弓	武藤 マリ子	安里 由利子		

令和3年度（整理作業）

教育長 伊藤 啓二 吉富 修（～6月）

教育部長 日野 和弘

ふるさと文化財課長 石木 秀啓

係長 上田 龍児 林 潤也

主査 徳本 洋一

主任主事 秋徳 敏明

主任技師 山元 瞭平

技師 齋藤 明日香

会計年度任用職員（調査） 澤田 康夫

会計年度任用職員（庶務） 三好 りさ 光原乃理子

会計年度任用職員（整理作業）

小嶋のり子 白井典子 仲村美幸 津田りえ 松本友里江

氷室 優 古賀栄子 小畑貴子 篠田千恵子



第1図 調査地位置図（1/2,500）

II. 立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

大野城市は福岡平野の南東隅に位置し、その市域は、南北に細長く中央が窄まる瓢箪形をしている。北東部には四王寺山山塊とそこから南西に派生する低丘陵群、南部には牛頸山山塊とそこから北へ派生する低丘陵群があり、両者に挟まれる中央部は御笠川の開析及び氾濫による沖積地及び氾濫原の低地を成している。南部の牛頸山は脊振山系の一角を成し、地盤は早良型花崗岩で、表層はその風化土である真砂土が覆う。松葉園遺跡は、古くからの乙金村の一角にあり、宅地化が進んでいて遺跡造営時の地形は明らかにし得ないが、古地図によると、市の東北部の四王寺山山塊から八つ手状に延びる低丘陵から、さらに伸びて平地部に接する舌状の台地の一つに立地する。このような舌状台地は幾つかあり、南側に並行して接する同様の舌状台地に森園遺跡、中・寺尾遺跡が所在している。

2. 歴史的環境

松葉園遺跡は過去4回の調査が行われ、主に弥生時代を中心とした遺跡と捉えられるが、他にも各時代に渡る遺構が検出されており、ここで、通史的な環境を簡単に記述しておきたい。

まず、旧石器・縄文時代の遺跡は市域では少ないが、本遺跡の1次調査で石器が出土しており、薬師の森遺跡、原口遺跡、古野遺跡などで確認されている。弥生時代には春日市を中心として遺跡が増加し、前期の遺跡は市域北部の丘陵・平野部に多く、特に墳墓遺跡は本遺跡を始め、低丘陵地に集中する。御陵前ノ掾遺跡、中・寺尾遺跡、原口遺跡、森園遺跡で甕棺墓、木棺墓、土壙墓などが展開する。集落では、仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡は前期末に出現し、中期に継続する。また、御陵遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡でも前期の集落が営まれており、周辺を見ると板付遺跡や那珂遺跡では環濠集落が成立し拠点集落を成す。中期になると、平野部で仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡が従前から営まれ、丘陵地でも中・寺尾遺跡、森園遺跡が営まれる。周辺では春日丘陵に大規模な集落・墳墓が出現し、須玖岡本遺跡D地点甕棺は30面の前漢鏡、ガラス璧、など豊富な副葬品を持つ「王墓」とされる。後期になると本遺跡でも遺構が確かめられている他、村下遺跡、榎町遺跡で新たな集落が出現する。周辺では春日丘陵一帯や那珂・比恵遺跡は拠点集落として栄え、東夷伝倭人条に記す「奴国」の中心地域である。古墳時代になると、那珂八幡古墳をはじめ、那珂川中流域に系譜の追える前方後円墳群が造られる。本市では前方後円墳は確認されないが、御陵古墳群周辺から三角縁神獣鏡の出土が伝えられ、有力な在地勢力の存在が窺える。古墳時代後期になると本遺跡の周辺部、乙金山山麓に善一田古墳群、王城山古墳群など群集墳が繁栄する。奈良・平安時代では森園遺跡、松葉園遺跡、塚口遺跡で輸入陶磁器を副葬する土壙墓があり、有力者の存在を窺わせる。中・近世になると現在の集落に発展するとみられる集落が成立し、御笠の森遺跡や宝松遺跡では方形区画溝が連続して見つかり、中・近世の集落像を考える上で非常に注目される。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

福岡市

1. 持田ヶ浦古墳群A群
2. 持田ヶ浦古墳群B群
3. 持田ヶ浦古墳群C群
4. 持田ヶ浦古墳群D群
5. 持田ヶ浦古墳群E群
6. 持田ヶ浦古墳群F群
7. 今里古墳
8. 堤ヶ浦古墳群
9. 影ヶ浦遺跡
10. 丸山古墳
11. 金隈遺跡群
12. 井相田D遺跡群
13. 井相田C遺跡群
14. 麦野A遺跡
15. 麦野C遺跡
16. 南八幡遺跡群
17. 雑餉隈遺跡群

大野城市

18. 唐山古墳群

乙金北古墳群

20. 唐山遺跡
21. 御陵古墳群
22. 御陵脇遺跡
23. 塚口遺跡
24. 御陵前ノ椽遺跡
25. 善一田遺跡・古墳群
26. 王城山遺跡・古墳群
27. 古野遺跡・古墳群
28. 原口遺跡・古墳群
29. 乙金竈跡群
30. 此岡古墳群
31. 松葉園遺跡
32. 森園遺跡
33. ヒケシマ遺跡
34. 中・寺尾遺跡
35. 花園遺跡
36. 薬師の森遺跡
37. 銀山遺跡
38. 原門遺跡

雑子ヶ尾遺跡

39. 雑子ヶ尾遺跡
40. 雑子ヶ尾竈跡
41. 雑子ヶ尾古墳
42. 釜蓋原古墳群
43. 笹原古墳
44. 金山遺跡
45. 釜蓋原遺跡
46. 仲島遺跡
47. 仲島本間尺遺跡
48. 川原遺跡
49. 御笠の森遺跡
50. 村下遺跡
51. 宝松遺跡
52. 雑餉隈遺跡
53. 石勺遺跡
54. 原ノ畑遺跡
55. 後原遺跡
56. 御供田遺跡
57. 瑞穂遺跡
58. 国分田遺跡

古賀遺跡

太宰府市

59. 古賀遺跡
60. 成屋形遺跡群
61. 成屋形古墳群
62. 裏ノ田竈跡
63. 裏ノ田古墳
64. 裏ノ田遺跡

春日市

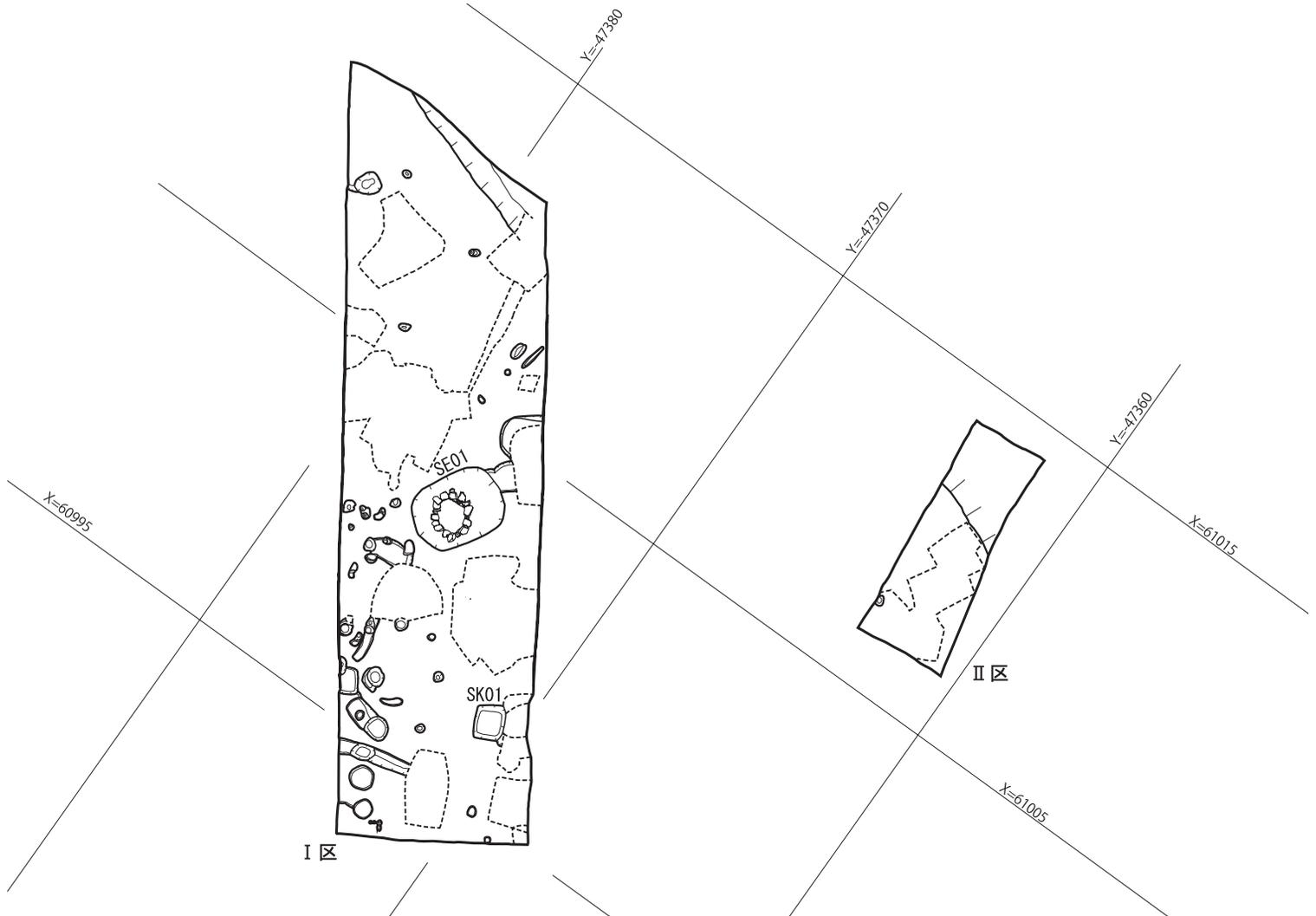
65. 駿河A遺跡
66. 駿河B遺跡
67. 駿河D遺跡
68. 駿河E遺跡
69. 原ノ口遺跡
70. 先ノ原遺跡
71. 立石遺跡
72. 先ノ原春日公園内遺跡

Ⅲ．調査の成果

1．調査の概要

松葉園遺跡は乙金山から舌状に西に伸びる丘陵上に位置し、これまでの4次の調査で、弥生・古墳時代を中心に旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。第5次調査地は大野城市川久保3丁目198番1・2に所在し、標高約23mを測る。

調査は調査対象地990.19㎡のうち、進入路となる2ヶ所の約150㎡をⅠ区・Ⅱ区として行った。調査の経過は以下のとおりである。まず、令和2年4月22日から重機によるⅠ区の表土剥ぎを行った。4月27日からは遺構検出及び遺構掘削を行い、掘削を終えて、5月7日からⅠ区の遺構平面図を作成した。Ⅰ区の遺構図作成と並行して、重機によるⅡ区の表土剥ぎを行い、遺構掘削した。また、平面図作成を終えたⅠ区の井戸の石組み内の掘り下げを進め、5月14日に掘り終えた。5月15日にⅡ区の遺構検出及び掘削を終え、19日にⅠ・Ⅱ区の清掃、遺構図、井戸の実測図を作成し、20日に全体の写真を撮影した。その後、5月21日に個別遺構図等を補足し、22日に仮設トイレ等機材を撤収、現場での調査を終了した。



第3図 遺構配置図 (1/200)

2. 遺構と遺物

調査時は調査区2か所をⅠ区、Ⅱ区として進めたが、建設予定地の東側に設けた小トレンチ状のⅡ区は殆どを重機による攪乱を受けており、辛うじて小ピット1個を検出したのみで、出土遺物もなく、Ⅱ区については詳述しない。以下Ⅰ区、Ⅱ区の表記はしない。

調査区はすでに削平を受けており、重機による攪乱が調査区のおよそ半分を占めていたが、そのような中でも、中央部に石積みの井戸、南東部に土坑、浅いピット群を確認した。また、調査区北ではこの遺跡が立地する丘陵の落ちを検出でき、遺跡が立地する丘陵の先端部が確認できた。

(1) 井戸跡

SE01 (第4図、図版2・3)

Ⅰ区中央部に位置する石積みの井戸である。検出時に石組みが崩れていて、古墳の石室を思わせる状況だったが、崩壊した石組みを除去していくうちに井戸跡であることを認識した。石組みを内

包する掘り方は検出面で

長軸幅が約2.8m、短軸

幅が約2.0mの隅丸長

方形を呈し、埋土は黒褐色

土であった。石組みが不

安定であったので、石組

みの石の上面が出るとこ

ろまで掘り下げ、以下は

掘削しなかった。石組み

井戸の内径は約104cm～

140cmのいびつな円形を

呈し、土圧により石組み

は相当歪んでいる。井戸

内の埋土は黄色ブロック

を含む灰褐色であった。

遺構検出面から約1.25m

の深さで石組が途切れて

おり、井戸底と判断した。

床面は黄色粘土を貼り付

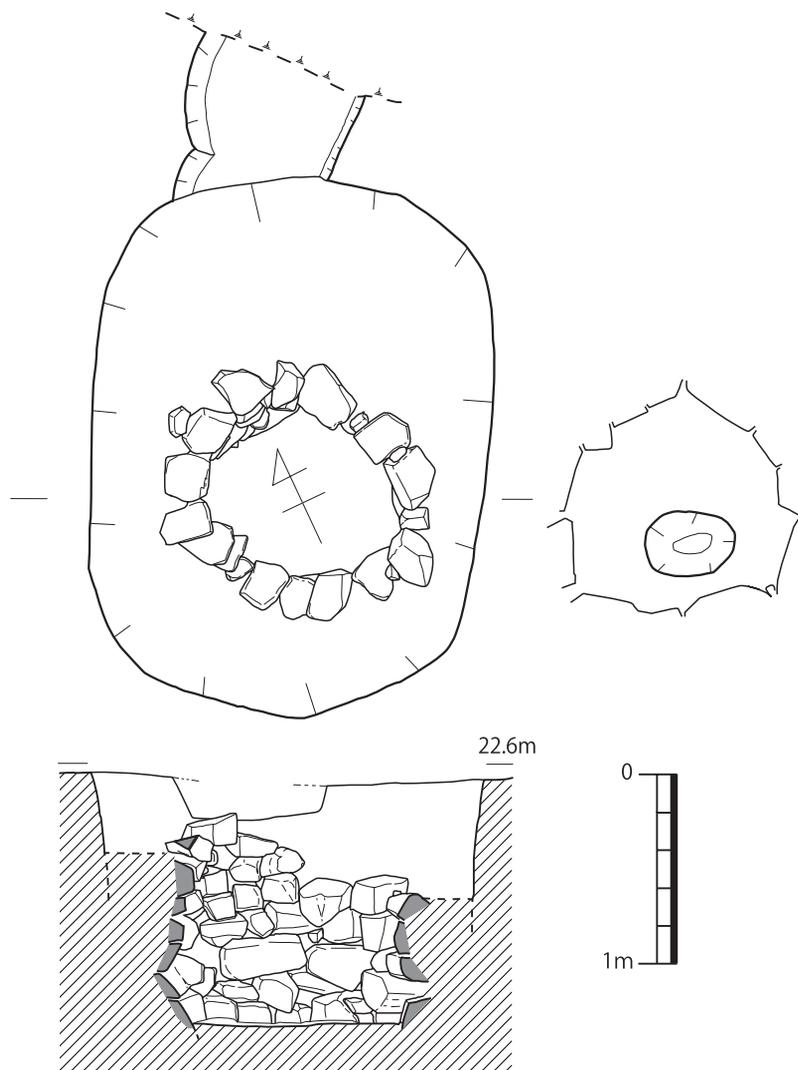
け、東西幅約44cm、南北

幅約32cm、深さ約17cmの

楕円形ピットが中央部に

残り、曲げ物等を置いた

跡かと推定される。遺物



第4図 SE01実測図 (1/40)

は、須恵器、土師器、土師質土器が出土した。

出土遺物（第5図、図版4）

須恵器

杯蓋（1）天井部の細片である。天井から肩部にかけて残存するが、磨滅して不明確である。外面は天井部へラ切り未調整、肩部がヨコナデである。掘り方埋土の混ざり込みか。

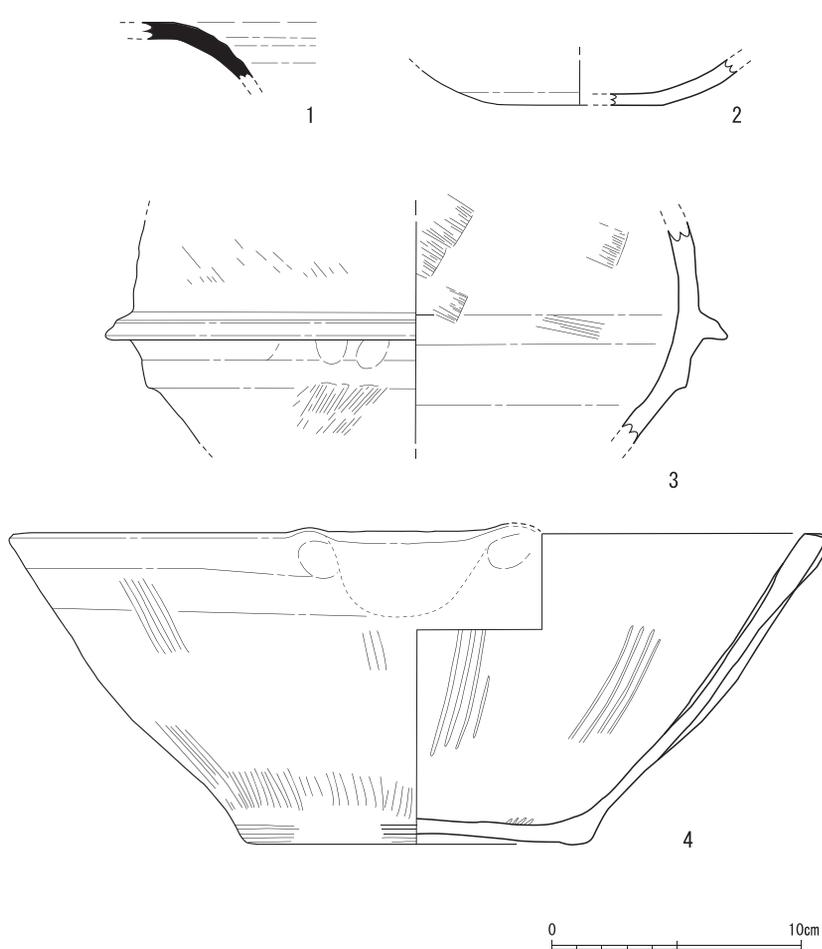
土師質土器

土鍋（2）底部の残片である。器壁が薄く仕上げられ、煤が全面に厚く付着していることから、土鍋の底とした。やや丸みのある平底で、外面は細かなハケ目、内面は丁寧なナデにより調整される。胎土は暗茶色を呈し、大粒の石英粒や雲母を含む。

湯釜（3）井戸埋土下層から出土した。胴部の破片資料である。全体に丸みを

帯び、凸帯のような小さな齔が、胴部最大径の位置に廻る。齔は断面三角形で、やや尖り気味の端部を下に向ける。齔下約2cmの所で器壁を極端に薄くしているため段を成す。これより下位に煤の付着があり、底部の器壁を薄くして熱効率を上げたものと思われる。調整は外面がハケを中心に施され、齔とその貼り付け部はヨコナデされる。内面は指やへら状の工具により丁寧にナデて器壁を平滑にしている。胎土に砂粒は少なく精良で、焼成は堅い。灰橙色を呈するので土師質としたが、下半や断面は灰白色で、黒化しきれていない瓦質土器とした方がいいかもしれない。

播鉢（4）上げ底気味の底部から直線的に広がる口体部で口縁部端が一番器壁が厚くなる。口縁端部は断面方形で、上端に中央を窪ませた平坦面を作る。口唇部を長めのコの字型に引出し、片口としている。内面体部には4条を一単位とするカキ目が6cm程の間隔を空けて施され、挿り目とする。カキ目は底部と体部の境目から口縁部に向かって引き上げられるが、カキ目の始まりはこの部分が使用により擦り減っているが、僅かに確認できる。外面は粗い刷毛目で調整される。胎土は精良で、砂粒をほとんど含まない。橙色を呈し表面は軟質だが、胎内は灰色でやや硬質な焼成である。



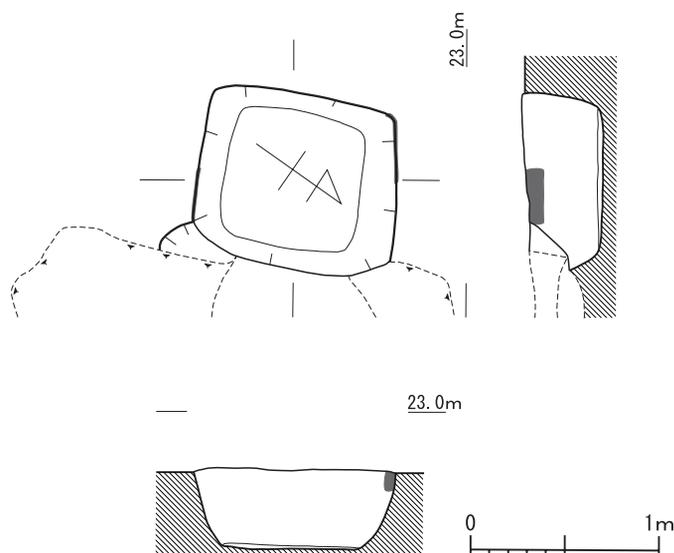
第5図 SE01出土遺物実測図（1/3）

口縁部内外に煤が付着する。全体の1/3を残し、復元口径32.6cm、器高12.7cmを測る。石組み埋土から出土した。

(2) 土坑

SK01 (第6図、図版2・3)

調査区の南東部に位置する方形の土坑である。ほぼ正方形に近く、104×96cmを測る。埋土は黒褐色土で、断面は箱形を呈し、深さは約40cmを残す。東側の壁面は攪乱により、約半分が削られる。南東部と北西部の壁は上半分ほどが焼け赤変している。焼土部分は検出面から約8～10cmの深さを測る。四壁の赤変は途中で終わり、土坑底までは至っておらず、また、土坑底に炭化物等の堆積は無かった。埋土中から、黒曜石片、弥生土器片、染付、青白磁等が出土したが、いずれも細片であり実測可能なものを図示した。



第6図 SK01実測図 (1/40)

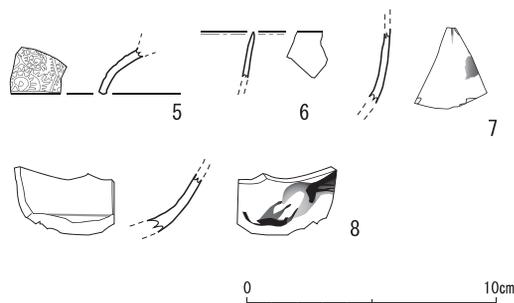
出土遺物 (第7図、図版4)

磁器

紅皿 (5) 白磁の紅皿の口縁部小片である。外面に蛸唐草文の型押しを施す。やや緑味を帯びた白色の透明釉をかける。天井部に僅かに摘みの痕跡を残す。

染付 (6～8) 6は猪口の口縁部小片である。口縁部端は直立して小さく尖らす。外面に青色顔料で遠山文を描き青味のある白色透明釉をかける。

7は小杯の体部片と思われる。外面に青色で文様を付ける。灰味を帯びた透明釉をかける。8は椀の体部片である。底部と体部の境から体部中位にかけての資料で、外面に唐花を描く。内面見込みには圈線が1条廻る。青味を帯びた透明釉をかける。いずれも18世紀後半以降のものと思われる。



第7図 SK01出土遺物実測図 (1/3)

(3) ピット群

調査区の南西部では攪乱が比較的少なく、大小のピットが集中して検出された。中でも径が60cm程の円形のピットがいくつか見つかかり、弥生式土器が出土している。これらは相互の関連や性格は不明であるが、丹塗り土器を含んでおり、祭祀的なものが推定される。その他小ピットも検出したが、建物等としてまとまるものはない。

出土遺物（第8図、図版4）

ここでは、ピット群や井戸横の攪乱、包含層から実測に耐えうる遺物が出土したので、ここで一括して記述する。

弥生式土器

壺（9・11）9は単頸壺の口縁部片で全様は知れないが、口縁部が内傾し体部が膨らむ形態のものである。口縁部に穿孔が一か所確認でき、上から下へ向かって穿孔されている。内外に赤色顔料が認められ、祭祀土器と思われる。ピットから出土した。11は球形の胴部小片の資料である。器壁は薄く仕上げられ、外面は赤色顔料が全面に塗布されており、祭祀土器である。短頸壺の胴部最大径の部分と推定して図化した。ピットから出土した。

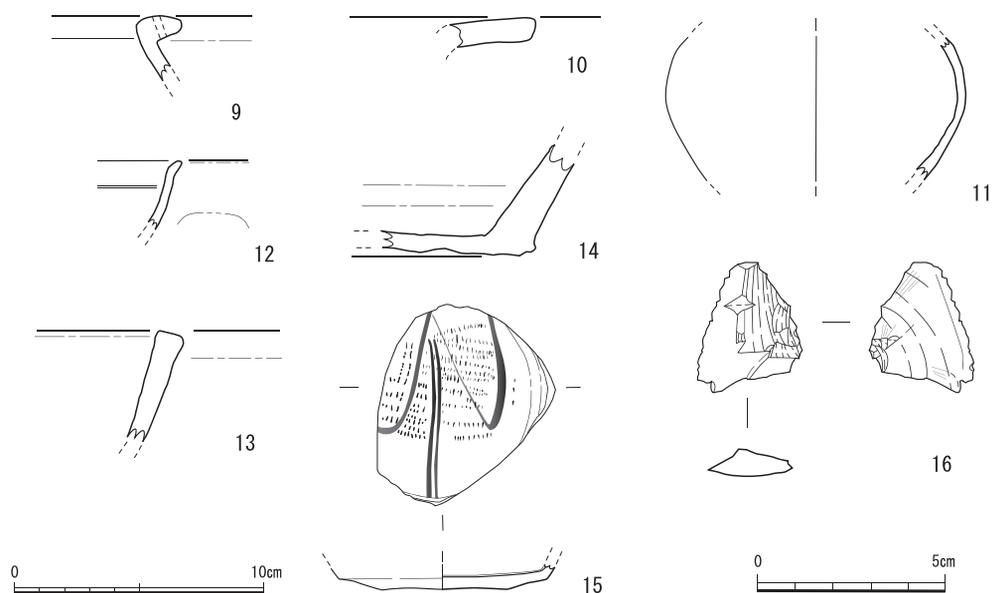
甕（10）口縁部の小片である、頸部は不明だが、逆L字状の口縁部と思われる。口縁部はやや上向きに外方へ引き出し平坦にする。口縁端部はヨコナデにより中央がやや窪む。赤色顔料は見当たらず、日常土器である。ピットからの出土。

陶磁器

白磁（12）口縁部の小片である。内湾する口縁部は端部近くで小さく折れて外反し、尖り気味に仕上げられる。内面口縁下に幅広で浅い一条の沈線を巡らす。緑色を帯びて濁った白色の釉をかけるが、外面の体部中位以下は施釉されない。胎土は灰白色で、黒色細粒を含め砂粒をほとんど含まず精良である。太宰府史跡分類の浅形椀XⅢ類にあたるが、釉の発色等粗製である。

土師質土器

こね鉢（13）口縁部の破片資料である。やや直立気味に立ち上がる口縁端部は外側に小さく引き出される。引き出す際のヨコナデにより端部平坦面中央が窪む。外面はナデによる仕上げがされ、内面には破片の限りではクシ描き等による条痕は認められないが、摺れて平滑な器面となっており



第8図 その他の出土遺物実測図

播鉢として使用されたものである。色調は橙灰色を呈すが、胎内は黒色である。胎土に砂粒を少量含むが比較的精良で、焼成は堅緻である。

陶器

甕 (14) 甕又は壺の底部片。体部に比べ、薄い器壁の底部である。底部外面には藁状、木の実状の夥しい圧痕が付く。体部は内外ともヨコナデされるが凹凸が残る。胎土は2mm以上の砂粒を多く含み、粗い。焼成は堅緻で、色調はレンガ色。12～14は井戸横の攪乱から出土している。

青磁

皿 (15) 同安窯系青磁の皿の底部である。底部外面中央を削り込み、やや凹面を成す平底を呈す。見込みに篋状の施文具で簡略化した花文と楡によるジグザグの点描文を入れる。薄いオリーブ色の釉を施すが、底部外面には施釉されない。包含層から出土した。

石器

石鏃 (16) 剥片鏃の未成品である。石材は黒曜石である。包含層から出土したが、他に図示していないものが1点ある。16だけ縮尺が2/3である。

IV. まとめ

松葉園遺跡は昭和54年の石棺墓の調査を皮切りに、今回で5回目の調査が実施された。今回実施した第5次調査は遺跡の範囲の北辺にあたる位置で、地形等により遺跡の範囲を限る成果も期待した。過去に行われた1～3次の調査は遺跡の立地する丘陵では今回調査地点より高位にあり、弥生時代の住居址や祭祀遺構、また、可能性として弥生時代中期の土器焼成遺構があったと推定されている。また、希少な旧石器・縄文時代の遺物が出土していて、この遺跡の重要性や、時代的な広がりや成果として上げてきた。

今回の調査では、近・現代の攪乱が多く、全体的に地形の切り下げがあっているにもかかわらず、ピット群や土坑、井戸を検出できた。土坑は周壁が焼けており、中で火を焚いたようであるが、その用途や性格については不明である、出土した遺物から18世紀後半以降のものと思われる。また、石組みの井戸からは播鉢や湯釜が出土したが、博多遺跡群107次調査⁽¹⁾・144次調査⁽²⁾、御笠の森遺跡12次調査⁽³⁾などから類似品の出土が報告されており、いずれも16世紀後半代の年代観が与えられている。そうであれば、本調査の井戸も16世紀後半の年代が与えられ、周辺での中世集落の存在が裏付けられることになる。

2・3次調査の成果は近日報告書として刊行される予定であるが、弥生時代を主体とするものの、新たに輸入陶磁器を副葬した平安時代の木棺墓が見つかっており、本遺跡が旧石器時代から近世に至るまで連続と営まれることが遺構・遺物により確かめられたことは今次調査の成果としてよい。

註1. 「博多104」－博多遺跡群144次調査－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第850集 2005

註2. 「博多80」－博多遺跡群107次調査－ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集 2002

註3. 「御笠の森遺跡6」－第12次調査－ 大野城市文化財調査報告書第134集 2016

图 版



I区全景



II区全景

图版2



SE01全景



SK01全景



上 I区落ち 下 II区落ち

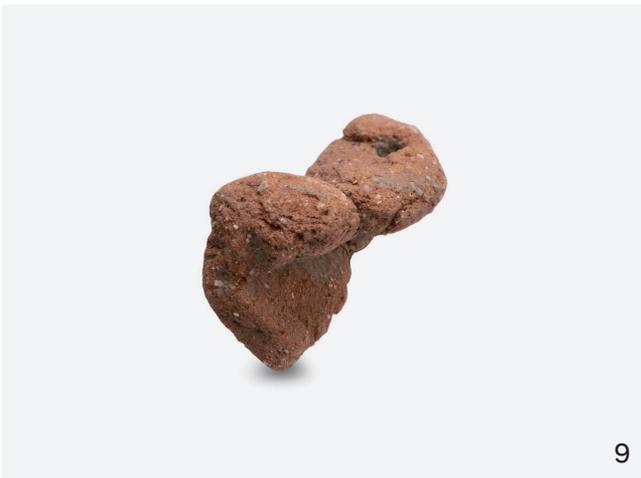
上 SE01完掘後(南から) 下 SE01完掘後(東から)



上 SE01上部検出時 下 SK01調査中

上 I区調査前 下 II作業風景

图版4



報告書抄録

ふりがな	まつばぞのいせき2							
書名	松葉園遺跡2							
副書名	第5次調査							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第195集							
編著者名	澤田 康夫							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2022年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつばぞの 松葉園遺跡	ふくおかけんおおのじょうしかわくぼ 福岡県大野城市川久保3丁目 198-1・2	402192		33° 32′ 56″	130° 29′ 24″	20200422 ～ 20200521	200㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
まつばぞの 松葉園遺跡	集落	弥生時代、 中・近世	ピット、井戸、 土坑	須恵器・土師器・ 染付・輸入陶磁器				
要約	<p>松葉園遺跡は市域の北部で、乙金山から西へ派生する低丘陵上に営まれる遺跡である。本遺跡では過去に4回の調査が行われており、今回が第5次の調査である。宅地造成に伴い、影響範囲200㎡について調査した。調査地点は1次調査の北西約100mの所で、遺跡の縁辺部にあたる。近・現代の攪乱が広い範囲で及び、遺構を断片化させているが、弥生時代のピット群、中世の井戸跡、近世の土坑などを検出した。弥生時代のピット群はいずれも浅く、建物としては捉えられなかったが、祭祀土器が数点認められたのは注意を要する。井戸は石組みのもので、全体が緩んでおり、不整であった。出土した土師質の湯釜等から16世紀以降の所産であると考えた。土坑は周壁が火を受けて赤変しているがその用途は不明である。出土した染付磁器から近世の時期を考えた。このように弥生時代から中近世に及ぶ遺構が見つかり、遺跡の広がりを確認できたのは調査の成果と言えよう。</p>							

松葉園遺跡 2

大野城市文化財調査報告書 第195集

令和4年3月31日

発行 大野城市教育委員会

〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社

〒848-0035 伊万里市二里町大里乙3617-5